

仮名読新聞の都々逸関連記事

菊池真一

仮名読新聞は、仮名垣魯文編集による、明治初期の代表的な小新聞である。明石書店から復刻版が出版されている。それにより、明治八年十一月一日から明治十三年十月二十九日までの『仮名読新聞』『かなよみ』から都々逸関係の記事を抜き出す。

『仮名読新聞』第三号（明治八年十一月五日）

○モシくだらない文句ですが妾きの心意気ですから添削て掲て下さいナ

「仮名読の文の便りに世間のうわさはせ鏡の身
だしなみ

「筆のつるぎでかき立られる恥も身の錆こゝろが
ら

皆さんお気をお附なはい 高嶋町 猫ちう

『仮名読新聞』第十一号（明治八年十一月二十一日）

○私しは持前が四海波のはうですが五時節柄にはチト

相生でも有ますまいとお廃止にして昨晚馬車道の富竹で聞きました福寿檐と語笑楽の浮連節から浮かれまして度々逸を作りましたから魯文さん聞て下さいド、ドウでげス

○泥の重荷をふたりで担ぎ形りも比翼の鎖り連れ

○胡摩刷新紙で隠したこひ路飛んだ心の活字が知れ

○包む恋路が世間へもれて恥をかながき新聞紙

○盗みした子に不便がまして新聞かく人怨めしい

○引手あまたの手紙に乗るとぼす麦湯も瓦斯のも
と

麦湯は時候遅れだが横浜ではまだ出ます

観世音吉

『仮名読新聞』第五十五号（明治九年二月二十一日）

（塘雨曰）「屁い屁い遣りも仕よふが屁んな声で屁たたくた遣ると屁茶無垢連だとまた屁んな所から尻が出て屁

こまされて屁イロするのは面白くないがすかし此場で
屁込で仕舞のもしまいましいさあど、一だ

「くさい文句の黄色い糞はそばできいてもへどが
出る

イヤモウきたネへきたネへ是から清潔な清めの腹屁の
祝詞をやらう屁やかしてはいけねへぜよしかエ屁ン

『仮名読新聞』第八十三号（明治九年四月十九日）

○故人都々一僧正坊「扇歌」といふ浮連天狗が面白節
の文句の中に「鼻とはなとが邪魔になりて口も吸は
れぬ天狗様お客大事にしやさんせ此面白サと矢鱈自慢
を言ましたが誇る中に謙遜る所ろが客を呼物で毎度大
入を取ました今時の木の葉連は似た山水のわいわい天
狗で学びは低くも鼻は高く目前も暗魔の七本杉碌な芸
術は出来もせず当なく打出す天狗礫霧闇に吹出す天狗
風余り鼻柱を延し過ると夜叉金剛に捻られますから成
丈お邪魔にされぬやう飛行を修行の勉勵に換へ其余力
には仮名読の寄書でもして面白節で世を渡り婦幼童蒙
を諭すが楽み「スツトコドツコイどつこいどつこい
「仮名の話しがお為になりて家も摺られぬ新聞紙」お
布令大事に読ましやんせ寄書面白や」「跡は此次」

麻布 筑紫坊広寿

『仮名読新聞』第四百十八号（明治九年八月二十四日）

○妾は貴社の新聞より他に浮気は致しませんヨ
秋が来るよな中ではないと日々目に染む雁の文

深川櫓下 小せき

『仮名読新聞』第貳百十六号（明治九年十一月十四日）

是唐甚句ドレ素読（じやない）都々句らう

「アー焼餅喧嘩と豆騒動は茶菓子た茶羅垣さんの新聞
の種ーね

「アー投書記載と郵送た新聞を没書塚とは菜酒な一
いカネヲヤヲヤ屑ですか

と軟菓子ましたが是も矢ツ張没書家かなアエ、儘世

東京南茅場町 わかな

『仮名読新聞』第貳百三十五号（明治九年十二月七日）

「行とも行ともすんでの事自己もお得意を一戸玉なし
にするを先生の心もとけ風也さんや若菜さんのお筆頭
で「橋塘」紛紜は有ませんおめでたうおめでたう一ツ
うなり升ぜ二上り恋といふ字サ

「没といふ字が意気地になれど記者と先手が仲直り

いまはゆふきの胸のはれ気凝な愚弄もないわいなア

仮名読売捌所 伊東専蔵

何エ先生も心が解たとソリヤア蟻が鯛ア、一座の衆に
気をもませたこんな愚痴は以来きツとつゝしんで是で

さツぱり一番甚九を鵜鳴ませう

「ア、ー実がないとはソリヤ此方の事無理な嫉妬に牛の角

「口は大切よ出這入り毎に度量がすぎれば身の破滅

牛嶋朦々山人

『仮名読新聞』第二百六十号（明治十年一月十一日）

○東京の粹個連から都々一百八を送られました記
者が天剛星と点を附た丈余白に載せませす

「撫付る髪は散ばつ袂は引けず手持不沙汰の明烏

「馴ぬ世話木戸土族と書いて野暮なやの字も鯨帯

浅草町 旧門柳

「夕辺の始末を探られたのか今朝の配りの新聞紙

「責られ責るも互ひの勤め記者も木竹の身ではない

花川戸 愚痴心

『仮名読新聞』第二百六十八号（明治十年一月二十

日）

○白「ではない黒」面の名さへも少々茶利めいた茶溪
と云ふ青書生が黄吻を翻へし真赤に成て性質の茶色の
声を張りあげて唄ふ文句は仮名読の讚でなく詩でもな
く亦録でもなし七面倒な石の上古人の謂た教言を八と
の事で古事付ても語路も句調も整はず十も甘くは行な
い辛極く苦いが百々一を茶々無茶苦茶に茶辺栗ますか
ら一寸聞て下さい

「心尽して書たる寄文を記者は茶にして没書箱

と唄つたら皆三が陳い陳い屁茶きはまるとお茶菓子だ
らうからモー一つ応頼を

「死なざ止むまい三味線枕らなんぼ新聞で消化ても

今度は猫連が若し聞「ドツコイ違つた」見たならば定
めしモー滅多にやゝ転びませんはなぜならそら大地震
が動揺たからさと塩々然として迂鳴で正ヲヤ忘れた忘
れた

『仮名読新聞』第二百六十八号（明治十一年一月二

十日）

○此程浴に行ましたら折節中は二三人職人体の者計り
で幸ひに都々一のお浚もなく水舟へは入の罵言も聞ず
反ツて議論を聞ましたが彼の人達は一個が散切二人が
半髪で有升たが其散切先生が水舟の傍で頭髮を水で洗
つてア、好手持だ併し寒く成て来たと柘榴口へ来て外
の人に嘶すを聞と《以下省略》

『仮名読新聞』第二百九十一号（明治十年二月十九

日）

○皆さんの鹿爪らしいお論しに引かへてわちきや馬自
目でドビーをチョット（西国出張官）

「ぬしはうわきな蒸気の煙りソシテわちきをステー

シヨン

余鞠古いかネ古い序にモー一ツ

「おどろかしやんスナ彼者いもの煙またも蒸気の罐のけむ

南陀歟薩張わからんデショー　お久し振の　わかな

『仮名読新聞』 第二百九十七号（明治十年二月二十六日）

○火事喧嘩茶店紫は昔の江戸の名物だと老輩の咄しに聞きましたが東京に成ても此頃はまた火事が名物に成升たが去年の二度の大焼から彼方にも火事此所にも火事と新聞にも出て居ますが其うち怪し火が多数あるので何処の区内も火の番でお世話しひと聞きました皆さん火の元は大切でありますヨちよいと聞て下さい（むツとして）の替うた

「鳥渡した事から起る火事の沙汰屯所の門へべつたりと又張てある焼た場所早く静にしてほしい

モウ一トツ角力じんく

「夜るの半鐘にフト起されて火事は何所に見へるやら
ボヤボヤ又です　為永美知女

『仮名読新聞』 第三百三三号（明治十年三月八日）

○親の余光は七余光とて昔しは随分貴重なものなれど方今文明の世界ではそんな因循漢はペケサランパーデ何でも各々其職に勉強して自己で光輝を放つのが官任要め這回横浜の仮名読新聞が東京へ飛出して親の脛をかぢらずに一本立の大奮発三人兄弟イツチ末子と名

も桜丸と美名を取り今世荅の花の香も此春風に誘はれて開業く貴社の五盛大を目出鯛のうしほ加減一盃機嫌で呑子のシアト祝酒代りのスツチンヤスツチンヤ

「アー誰も見たがる諸君の投書雑報戯文は記者の筆

親子で編輯ですか

あとが和歌の浦だよ

「貴社の新聞には印居が補助る親新聞に分転他に社を開きほんに盛り升日に広まるよ仮名の書立奇麗の文字看客は多けれど増殖るといふ事を記に計算るサツサなんと賞か同賞ぞいな　芝米洲

『仮名読新聞』 第三百八号（明治十年三月十三日）

○不景気で困る何因循仕給な悪い跡は宜は必せりだ不印迎憂る事なかれスツチンヤンヤンで陽気に唄べしやるべし

「アー附て行たや熊本さして責て南の関までもヲヤヲヤ惣出数加

跡は三下りだが色が在り釜輪内ヤラカセヤラカセ

「戦争も視事に勝利電信機繰出すがらニヤ悪迄も勝て
帰らニヤならぬぞゑ

何れ又其内に親釜州　紫美都

『かなよみ』 第三百七十号（明治十年五月二十一日）

之に就て可笑なお珍談は二三日前の事ですが四五人連の若い衆が金春辺の弦妓家の前を通行ながら一人の男

がコ―此船板の堀を見さつせえ戦場の事が想像やられるぜ頓と鉄炮玉が当つた痕の様だぜ「何ダエ歌妓の家の前で玉が当りとは是や感心猫に聞せたら鼠鳴といふ処でガス少と気楽過て済ねえが雛妓が弾てる三線に合せて一寸板に成たやの替作だ

「板が気になる那ふな板が後象だ軍は止とくれ

四五人の声でイヨ美音美音と褒ながら笑ひ興じて居処へコヤコヤ市中往還に於て高声放歌は成んゾとの鶴の一啖で群雀の百轉も忽地静に成ましたトサ何事も巡查さんのお影で高知隊ものですネエ熊先生 新橋籟生

『かなよみ』第七百一号（明治十一年六月二十六日）

○昨日載た横浜富町柳瀬湯の女殺しに係るの一件かと憶惻られる郵便が同日弊社へ届ました其緘紙には

銀座出雲町カナヨミ新聞社 カナ垣大君

（脇書）但し本日より馴シ横浜へ立帰り政府ノ差
凶受ル所 サキガケ新聞披見致候付死去者は無論ノ事
故矢張小子も死スル也 従 終命人

六月二十五日午前第九時

開封中三通の書面その内半紙一枚に記せし文言

書置ノ事

堅イ娘ト人目ニ見セテ矢張親父ノ金箱ダンベ

悪イ女を女房ニ持テば矢張亭主ガヒンスルダンベ

此他書置事数ヲ不知更ニ文略ス万端御賢察願ヒ升

『かなよみ』第八百四十五号（明治十一年十五日）

○「妻恋の其後朝に声立て烏猫さへ憎まれやせん」とは貴社の猫々道人が詠れし狂歌とか聞ましたが逢夜短き牛房尻を探訪どのに目着つて猫々奇聞へ筆記れ共寝の床は唐草の夜具のうへにて居茶附た胡蝶の夢も破れかぶれお恐れながらと出掛るは有無を論ぜぬ「スツパヌキ」記者を「ヒイヤリ」させる猫も何処にか有ると聞た風に一番都々と出掛れば斯だ

「猫の原告縁切えのき野暮の願ひの未開連

「猫が死んだら鯨のたより男地獄へ落るだろ

金港多湖只楽

『かなよみ』第八百四十五号（明治十一年十二月十日）

五日）

○「赤いけだしに迷ぬ者は木仏金仏石仏」とは名高きざれ唄にして「いつくさに見ゆる中にも取わけて先ぞ目につくくれなゐの色」とよまれしは蘆庵大人なりけりされども今や楊柳街頭、錦花猫蒼を応来（否）往来して左り棲の間よりチラリと見れば赤いけだしは稀にして多くは白縮にあをみを帯て（但し蚤の糞の有無は知らず況や一件の染みに於てをや）ゴリゴリ然たるものを香風に瓢へしてカラコロと来るを見る茲に於て小生思へらく（が始かまりけらく）嗚呼怪しいかな古より赤きこそ迷ふとはいへ豈此白色のけだしに迷ふものありといはんや今の人物は目鏡違ひをせりと岩猿べか

らず但しは昔の人物はかの漢の高祖が再来にして悉皆赤帝の孫なるか今の人物は悉く白帝の生れがはりなるも知るべからず仍て之を有名(ヲツト)幽冥の怪化先生に質す 中坂の迂生

『かなよみ』第九百六号(明治十二年三月五日)

腹の上野の交艶地

臍の下谷の池の端

山佳面名所案内

- 色気離れた彼遅桜毛虫ばかりが爺無妻 武蔵屋大鉄
 - 阿姉気取で浮浸く薫り盛り過たる姥桜 梅本おみき
 - 鼻の先なる彼歌かるた取も止め水の月 稲屋小みね
 - 鼠や鯰に猪貝出して遣ず遁さぬ福羅猫 福嶋屋小悦
 - 売出す若手の能店開き卸計と極おけ 和泉屋お福
 - 高尾薄雲入山形を越て売れ升麝香ねこ 三浦屋小仙
 - お国名物顛りかへる伎で振まく赤の飯 越後屋小兼
 - 鰯背ぶるかよ仇塩辛い木遣崩の自味噌 住吉屋豊吉
 - 鯰に縁ある鱸の脱りはねて艶容水の皺 福田屋ひと
 - ベ子の兎の面白々と飛だ目出鯛荒が有 成田屋小べ
- (余白がないから跡は追て)

『かなよみ』第九百九号(明治十二年三月八日)

○九百六号下谷百々逸の続き

- 薔薇の花とは岡目の眺矢鱈引搔爪の跡 浜の屋浜吉
- 澄菴汁は薬味の卸し眇は医でも愈る味 播摩屋とく

- 鉦引手で世を老猫の色気染ても八木廻 升屋かま八
- 顔の長いも短い夜半も酒と何かの食続 山城屋小糸
- 頓て出ぞへ猫々奇聞売る若手の美毛並 池田屋小浜
- 散か散ぬか綻かゝる花の折枝誰がもの 中島屋小住
- 旦那は池内妾は手疵と云た便の伝信機 すみ屋小藤

『かなよみ』第九百一十一号(明治十二年三月十一日)

○追々上野の花も萌み盛りの色の頭はれる下谷猫の品定めは九百六号から九百九号へ飛んだ間違ひは「升屋の釜八」鉦引手で世を老猫の色気染ても八木廻りと唄はれた姉さんは「柏屋の直吉」と入違ひであらうとの再報せ釜ちやんにはお気の毒依て前号の名前は取消又更めて姉孝行の奇特の事は能く聞正して美事善報に載ませう儲記残した百々逸はお仲間外れにならぬやう猫々再々うなりますから看客辛抱して頂戴

- (猫の子子は皆種替り出ては引込鼠取 中村屋ふで)
- (女弁慶千人切の相手はきはらぬ達者物 川島屋もと)
- (斯る契りは又有難い泣て嬉しい閨の内 吉野屋たか)
- (頼む妾の実の成主は然も小梅の好た人 ぶぢ屋こと)
- (小粒乍も非理利と辛い誰も舌卷山椒猫 天野美佐吉)
- (早い早いも何時煮て最早余語財喰加減 中川屋せき)
- (お酌の時唐小酌な仕打今蛇猶更大開毛 ぶぢ屋すゞ)
- (恋に樓れて毛並も薄く庇迂路迂路猫痾腰 柏屋小ちか)
- (蛙看たび飛付猫の果は蛇でも飲だらう 梅本小たけ)

(瓦けのない庇をそゝり男猫なら一拵尾 堀井小いな
(小蝶計りに吸せる者か妾も吸升花の露 柳屋まつ吉
(断ツた男をお床の中で横に鯰猫子守唄 山城屋小蝶

『かなよみ』第九百十三号 (明治十三年三月十三日)

神明の扉帳

宮内の内腎

芝鰻猫腥百々逸 新橋ゆたか原稿

- 月に村雲実入の稲も何か季候で虫が附 松本小八重
- 水に流して過去事を人に問れて鼠なき 藤屋小繁
- 結ぶ江西か斯成上は川と云字で寝看鯛 三田屋百代
- 覗く籠目に俯く鳥を心ろ楽むうかれ猫 川越屋稲吉
- 人真似小擬で猪口貝出て狙掛たよ大鼠 永楽屋ゞ吉
- 妾や花守看目に看てなぜか折せぬ糸桜 若竹琴吉
- 転り返よ吹竹のお化当り次第の筒の先 恵美屋吉六
- 髭の鯰は妾は忌い跳る鱈がたのもしい 叶屋福助
- 妾や鉄砲負ても能が主は名主で狐けん 江沢小かつ
- 忍ぶ道筋届いたからは跡の五見を松計 三沢かね吉
- 質素な暮の二人が中を買は訳知粹な人 藤屋小かめ
- 世帯染てもお酒の加減偶に陽な時も有 駿河屋いま
- 表浮気で心の根ゞ緩まぬ三筋の糸工合 叶屋鈴八

『かなよみ』第九百十七号 (明治十二年三月十八日)

三途川の水上
築地川の櫓下

新富猫戯房再逸

- 男えらみは妾は兎角お金が光る君 田村屋小由
- 根ゞ堅めて心の駒は狂ぬ手活の梅の鞭 松本屋大駒
- 続く座敷は二口三口離ぬお方も右左り 近江屋万吉
- 人目関根は手管で防ぎ蔭で浮気の暑乾 大黒屋小品
- 引たと見ても再勤腕は流石亀山お化猫 小松屋金八
- 鯰猫筋でも鯰は喰はぬ朝は半纏子守猫 岡田屋小歌
- 引手数多の取退無尽鬮を引より髭を引 佐野屋小万
- 籠の鳥かよ楽屋の隔打出待のは其由縁 中野屋愛吉
- 心細糸便りはお前合す調子がうすと杵 万字屋お万
- 打出す鉄砲名主ではねて奇猫妙拳釣狐 松金屋東八
- 地震の授児声ふるはして髭の数読鯰猫 村田屋こひ
- 芸や艷容蛇妾は売らぬ腕と欲との生る迄 三芳屋三吉

『かなよみ』第九百十八号 (明治十二年三月十九日)

(新富猫戯房再逸きのふの続き)

- 人は白梅風音なく外へ漏さぬ麝香猫 佐野屋元吉
- 腹が立なら此腹帯を探てご覧よ誰の種 かねや仲吉

- 毛並の黒猫斑？売らぬ狙ふ鼠の取て置 岡田屋政吉
- 妾の天窓へ鯨は乗ぬ乗て見鯛は飛の魚 小松屋福助
- 初と看ても手馴た化し頓て鼠を取駄郎 吾妻屋若吉
- 開て云れぬ内幕話チョンと打込木の頭 辰巳屋小菊
- 自前に成鱈隠て置た筋を一度に惚気鯛 岡田屋小光
- お前は赤坂妾は築地尻を振出す大鳥毛 室屋やつこ
- 猫の役目だ取ねば成ぬ鼠鼯の忌なく 松金屋小園
- 質素に看たる世渡上手男防ぎも誰が為 坂井屋栄吉

『かなよみ』 第九百廿二号 (明治十二年三月二十五日)

- 裏河岸の浮寝鳥
大棧橋の浮連船
猫柳眉玉百々逸
- 梅の兄貴は昔の眺め今じや弟に帰り橋 海老屋はま
 - 妓事の元々お暇猫の毛並が宜程醒安い 山崎屋亀吉
 - お公家君方華族の娯前沢の螢で身の光 高橋おつね
 - お嬢猫とは表の飾内は手に手を筑紫琴 千代田みよ
 - 幾世久しき毛並の艶に色香馥郁麝香猫 柏屋おひさ
 - 公債証書で黄金の桜散も盛るも主次第 和泉屋かつ
 - 起証製紙を三田上唐は引は林と岩瀬内 柏屋うめ吉
 - 川崎の大師詣も君を的祈る福田の大益 橋本屋氏糸
 - 古川を洗揚よか新規筋も或秘で儘成ぬ 興津屋ゑい
 - 外が浜でも娼法為よ家用津軽の千鳥猫 山本屋幸吉
 - 野辺の若草善地で延て盛る小松と背競 長谷川小清

- 温泉で洗上足身の売物を飾肌の福井町 堺屋あさ吉
- 二度が三度と出返猫は鼠取癖忘れぬ 金子屋常吉
- 世帯の開拓山気の盛田鼠取のが妾が職 伊勢屋千吉
- 始め尾張屋盛も過て焼で飲升奴論けん 柳屋さい吉

『かなよみ』 第九百八十九号 (明治十二年六月十二日)

《前略》亭主は少し怪しいと日頃目配して居るを或日の夕方米屋の男二階へ登り浮き浮きと新聞読むも都々のさわり文句の高調子笑ふやらすねるやら巫山戯最中二階の梯子のぼる足音荒々敷密夫見附た其処動くなと大声揚て入来るは例の亭主の亀五郎に此方は吃驚欄干より軒ほ飛下り彼の男子は雲を霞と逃失けり

『かなよみ』 第千百十式号 (明治十二年十一月七日)

○都々の好きな人は都々一を驚々口璃葉唄のいゝ者は葉唄を唄ひ詩でも碁でも狂句俳諧お酒が好なら其場で自腹猫が欲けりやア直近間呼ぶも呼ばぬも自儘自由勝手我儘を趣意として来る九日柳橋の生稻で数敵滅炮会と云上下混信道楽会を開くと云ので弊社のおかなも仲間だとやら射的鉄炮会に当る当ると独で浮付て居升而て会主は例の小林大助が勇肌の進退幹事は今業平の杏村大哥です唐さぞネー

『かなよみ』 第千百二十六号 (明治十二年十一月二日)

十五日)

○《前略》当時東京で真打の五本の指と云囃される浮連節の大隊長都々一坊扇歌は去年の秋頃京坂看物附たりの錢儲け足はなく共帰途にはおあしを沢山土産にせんと目的と越中禪外れるとはおもひも寄らず遠く隔つた海山越て遙々浪花へ艀着てから諸所方々の席を打例のヲホンと傲慢とで一々確乎しめ込んと此方は天狗の鼻高々東京下りを肩に被阪地在碌を压倒さうと紫檀棹に艶をつけ象牙のテンジへ糾を懸トツトリトンの糸の音を淀の川瀬へ響かせて八百八橋の橋杭を愚邏つかせる目的が外れ十八番の乗合舟で八間屋からマツチヤラコ三十石の目白舟へ逃る様に飛乗て扱西京へ巢を替たが此処でも矢ツ張入がなく鬱気の虫や赤裸体胴舌らよからうかと思案に呉て入相頃扇歌が止宿へ入来るは祇園新地の芸子にて当時盛りの扇屋兼吉(廿一)「お師匠はんはお家ドスカ (以下次号)

『かなよみ』 第千百二十七号 (明治十二年十一月二十六日)

○都々一坊扇歌怪談(昨日の書続)江戸紫に京鹿の子清潔とした色あひは兎角水道の水に垢脱足がなくても人並に優ツた処が百人力一枚看板に万客を迎えるは芸が身を助ける程な不仕合扇歌はつくづく思案に暮れ糸より細き心根の是より先の継棹を胴して九両か十円の小遣ひにも困る箭先へのし進上と兼吉猫が土産に贈る

包みの中心あり明ランプの照光に恥かしさうな其容体を見てとる弟子はム、誂たと其場を程よく外した跡は互ひに移す恋の情足が無れば一緒にならうと(も正か云は為舞が)夫より兼吉は大逆上毎日毎夜扇歌の処へ入浸りの意茶付に兼吉猫は家売り衣類を売り遂には櫛笄身の回りまで曲込で皆な扇歌へ入揚たは安く積つても小千円心こゝに非ざればで客の待遇も悪くなりサア左様なると扇歌との浮名愈々高く成て来たのが当人の瑕瑾とやらで何処の茶屋からも口はかゝらず今度は扇歌に引替て兼吉猫はナイラの難症二進も三進も身動きが出来なく成て何処へ堂する目的もないと扇歌へ泣付て是非東京へ連て行て呉ると頼み込と扇歌も幸ひ誤難の場合共に東京へ連帰らうと相談は極つたものゝ何を云にも不自由な不具のかなしさ一ト通りの路費では出立もなり兼ると金策の為め兼吉を勢州四日市へ稼ぎに遣り幾干かの金円は出来たと云ものゝ流石は都々一坊の名目あれば京地を発途にも入費多く兼吉が丹精の其金円も木の葉と四方へ散失て残るは僅少計りゆゑ兎も角もはやく東京へ帰つた上兼吉を迎ひに遣る金策でも為にやなるまいと心はやれど足はず、まず(お負におしがない空)無抛東海道を稼ながら上る途中尾張の名古屋に暫時止まり茲で路用の金円でも出来たら兼吉も迎ひに遣り一緒に古郷へ帰らばやと思ふにまかせぬ席の不入彼是此処に躊躇うち風の便りに勢州の兼吉方へ扇歌の名古屋に居る事が悉しく知れると兼吉は不審

晴ず此頃少しも便りの無は如何した事かと案じて居たに男心の情なや妾を棄て東京へ密と帰る簡ならんア、恨めしの男やと女心の嫉妬の念瞋恚の焰に胸を焦き今まで多くの金円も入揚欺されたのが悔しいと齒嚙を為して泣叫ぶ口惜涙にうち咽び前後生体なかりける
(以下次号)

『かなよみ』 第千百二十八号 (明治十二年十一月二十七日)

○都々一坊扇歌の怪談(昨日の続き) 恁而兼吉は勢州四日市より尾張名古屋の扇歌が許へ文したゝめて恨の言の葉さへ薄き縁をかこち先だつ涙病の床に棄らるゝ身をうち歎き越方の約束行末を案じ煩らひ万縷の情を筆に込使の帰るを待うちに此方には又其文を手に取りよしも打驚き封おし開き読下せば当時病気の其上に身動きならぬ貧苦の体唯是儘に打捨て往ば死でも恨を報ふと薄気味わるき筆の綾扇歌は性来の小量ゆゑ兼吉が事を深く恐れ一時は己れが気もおかしく夢に現に正氣を失ひ兼吉兼吉と朝夕に口に出さぬ日とはなく附属の弟子も気の毒ゆゑ早く師匠に安堵の為兼ちやを迎ひに遣らうと種々の金策に漸々と金円五十円を才覚し使に為持て勢州の四日市へ急ぎ遣はし直兼吉に手渡しなし其処の始末を程よく附て使は兼吉を同道し名古屋へ間もなく着はしたが何分病気に枕上らず臥たる儘に扇歌に對ひ唯恨めしい情ないと涙に暮る病の床そればツか

りを病言に医薬も驗の見えざるゆゑ扇歌は深く案じ煩らひ宥め慊して本腹とおもふに任せぬ日増の重症色白かりしも青ざめて髪さへおどろに振乱れ目は落窪み頬はこけ面瘦したる形相は現世のものとは思はれずいと憫然に扇歌を始め側の弟子さへ相談して兎も角東京へ連帰りよき医師にても治療を乞ひはやふ全快させたしと相談を取極め枕も重き病人を駕籠や人力車に助け乗せ緩々東海道を上る途中遠州浜松迄来りし頃兼吉の容体いと危く逆旅に四五日逗留中夜半になると悶え苦しみア、口惜い情ない取残されし恨めしいと秋の虫より猶細き声泣咽す病床に扇歌も弟子も側に寄背撫で摩り宥めても耳には入らぬ断末魔隔紙をもちて吹来る無常の風に誘はれて憐れにも兼吉は廿一才を一期となし明治十二年五月廿日有明待ぬ燈灯と共に消ゆく果敢なさは側の見る眼もいぢらしく扇歌はいとゞ哀れを増し野辺の送りもかたの如く同駅の松源寺へ埋葬し香を薫き密葉を手向て頓生菩提を厚く吊ひ建し卒塔婆の法名を唱へるさへも有し日の面影見えて扇歌が胸に一朵の薪ならねども樵る計りなる思ひの種を茲に蒔たる死者の遺靈夫より扇歌は鬱々と思ひ内にあれば色外に頭はれて食事も侷まぬ氣病の為に又其処に四五日の光陰を過し為こともなく引込居たるを弟子は扇歌を促がして斯て有可きことにあらずと東京投て出発し人力車の轍に駅路を足はなくとも継立継立入船多き品川の恋の港を後になし身代限りの高札ある日本橋を打越て馴し古

郷の我宿へ日も西山に春づく頃人力車を横に着にける
(以下次号)

『かなよみ』 第千百二十九号 (明治十二年十一月二十八日)

○都々一坊扇歌の怪談(昨日の続き) 恠て扇歌は本所横網の宅へ帰り唯旦暮に没りし兼吉が事を而己思ひつゞけて晴るゝ間なく鬱々と席へも出ず引籠て居たりしが如何せん家内は別に稼業もなければ糊口も困じ果かゝるは扇歌の身一ツ故弱りし心を取直し背に腹は替がたく諸所の席へ出勤することゝはなりぬ去れども持病の疴症と氣鬱の悩みに三味線も思ふ様に弾ことならず休席になるものから自分ながらに又一ツ苦勞を増して猶更に利ぬ身体を打歎き遂に先月の初旬つ方より正氣を失ふ狂氣の沙汰婦女を見ると兼吉が濟ぬ濟ぬと寄添て詫る言葉の氣味悪さ其処に其人ある如く又は深夜の静かなるに扇歌の臥居る部屋の中に兼吉が居ると覺しく笑ひ声のゲラゲラと有明の行燈に影を写し扇歌が床の枕頭に病ばうけたる身体にて瘦細き両手を平坦とつき涙に袖の秋草を濡す霜夜の露の玉乱れし髪を搔わくる頭も重き疲勞の体を見るより扇歌は夜具跳脱才、兼吉か濟ねへヨと狂ひに狂ふ其物音を家内の者に静められては夢か現か其まゝに寝入るは毎夜の怪有な話し素より幽靈生靈のあるとありあり書つゞりし昔時ものせし読本に比しき事と看官のお笑ひあるは左る事ならん

が是が所謂神經病己から起る怪談変事是ぞ全たく兼吉に深く迷ひしおもひを引き狂氣となりたる心の苦惱見ゆる容姿も幻しの我から作る婦女の面影たゞ此儘に打置なば日々に疲勞を増のみにて病痾の癒ることあるまじと三遊亭や柳亭燕枝が殊に氣の毒に思ひ遣り屢々病ひを訪音信るも扇歌は少しも正体なく夢中の体に他を云のみ誰と見定めもつかぬ様子を医師も殆々手を束ね法を替葉を変て種々に治療を尽す折柄弟子誰彼も協議して師匠の心を休めんため歌童と云るを一人撰み四五日前に浜松へ出立させ彼松源寺の兼吉が埋骨を東京へ改葬しし厚く法会を執行なはんと夫々準備にかゝり居と聞がまにまに薄氣味に身慄ひ為ながら書つけました(先今版は是切ドロンドロン)

『かなよみ』 第千百三十四号 (明治十二年十二月四日)

○《前略》先猫社会は他人さまの雜報種をおセツカイに投書するより私なぞはあたまの蠅が追きれません皆さんさうじやア有ませんかソコデ矢張せうこりなく度々逸の書でも投書

仲の町

小せん猫

種を取る氣か手を入れ穴をさぐつて見たがる探報者

『かなよみ』 第千百七十号 (明治十三年一月二十一)

(日)

当世都々一

建し海苔亀朶思ひはひゞの枝についてはなりやせぬ
桶町ほそめ

ランプ天窓でぶら挑灯を提てまよふも恋のやみ 神

保町初己

義理と情けを算盤玉にかけて恋路の二ツ割り 石原

町舟楽

月にむら雲花にはあらし鯨づに地震がなけりやよい

鞍馬小僧

口先ばかりで腹へは入らぬぬしの癖だよまき煙草

本郷藤廻家

『かなよみ』 第千七百七十二号 (明治十三年一月二十

三日)

当世都々逸 (題) 五色、五行、読込 横須賀通人

白い晒しの人柄よりもいつそ浮気な水あさぎ

つまらないとて泥棒すれば赤いお仕着で土かつぎ

青い木の葉とおまいのこゝろ散はせぬかと苦勞する

黄色いお金はむかしの事よ今ぢや猫でも紙次第

黒い洋服着かへるうちに火ばち持出ししく蒲団

『かなよみ』 第千七百七十五号 (明治十三年一月二十

七日)

都々一 鞞文句入

青物町 会田皆真

「初手は真実今欺されて、これは何ぢやい室のうめ

「久しぶりだが人目もあれば、飛で見たやぬしの側

「見れば見る程アレ水際の、たつた壺人りのアノ男

清元文句入

茅場町 賛々亭小さん

「逢た見たさは飛立ばかりあへば言葉もなくばかり

「おなじ泥でも私しは鯨ぬしは鯨のとどころ

『かなよみ』 第千七百七十七号 (明治十三年一月二十

九日)

当世都々一

賛々亭小さん

「こがれ紀の国忍んで門に往つもどりつたちばな屋

「三筋に蝙蝠りや離れぬ中よ転ぶ女猫にこけぬ杖

「十八番地と知つては居どかんじんちやう名聞洩し

「逢てうれしや大願成就ひと目にかゝらば一大事

「憎らしいぞへ舞台の鳥はつがひはなれず竿の先

「親の異見と新聞記者が式人りの為には敵き役

「かみを捻くり私しはいくよむすめ芝居の誘ひ合

「足とあしとに力らを入れてふたり骨折る馬のあし

「続けて見たいよ又二番目をホンに見事な大道具

「八千代獅子まで身が合方といふて私しを捨ぜりふ

「人目厭はず手に手を取て送りむかひの茶屋男

同新富座

白石噺

「だゝアがアマに背いて惚た主に赤はらたれはせぬ

同猿若座

金目貫

「角樽の愠気らしいが当にはならぬ主の詞の空鉄炮

同久松座 嬾笈摺

「弓と弦なる道ふみ迷ひはるばるたづねて紀三井寺

『かなよみ』第千百八十四号

当世都々一 清元文句入

賛々亭小さん

「きやつにうつかり眉毛をよまれ自分免許のいろ男
「よもやと思つた二人が浮名ながす上手の帰りぶね
「漸と首尾して逢たる中もひと夜限とは気にかゝる
「人の意見と世間の口が煙に柳のたばこぼん
「痴話と口舌がもつれてつひにすねて見せたる瘤柳
「内心如夜叉と知つては居れど見るに心も深見草
「適のドンタク遊歩ぢやものを何も訳なき憂はらし
「世事で固めて浮気でこねて尻の毛までも抜く女猫
「やがて苦界の束縛といて妾やおまへの政所

同断 常磐津文句入

新川 全亭真随

「ぬしの心はアノ陸蒸気（小糸）「ようそんな事今さら
に云れた事かなんぢやいな「いつか妾を煙にする
「おまへの心に電信かけて（おはん）「何にも云ずふり
袖の袂かざしてかほ覗き「私しの胸をば知せたい
「相合傘さへ人目を厭ひ（老松）「天俄かにかき曇り大
雨しきりに降しかば」ぬしと忒人りで乗る車

『かなよみ』第千百九十一号（明治十三年二月十七日）

当世都々一

茅場町 賛々亭小さん

文字の鎖り「かごを放れて手飼とならばはれて連れ
添ふ深いなか

源氏の名入「夢のうきはし中さへ絶えてなかぬほた
るの身をこがす

金閣寺狂言「雪の降る夜にこのした紐を解いて添寝
をまつながさ

外国の称入「雪やアメリカフランス道もおかほ見た
さのかちはだし

洋語入「帽子片手にグーバイサンキュまたの御げん
と手をにぎる

漢語入「柳巷花街のもの言ふはなは嘘言実情咲き分
ける

新聞社印刷「分れ茶居共ほの字とれの字あへばする
のは活字版

『かなよみ』第千百九十七号（明治十三年二月二十四日）

当世都々一 唐詩選入

大鋸町 大崎信

「十二時を打には間も有るまいと「客心争日月来往予
期程」道を飛ばせる人力車

「手鍋さげるはかてのねがひ「深林人不知明月来相照」
わびしい暮しが身の薬り

「鍋やきうどんもいつしか寂寞と「山空松子落幽人応
未眠」更けて淋しいかねのこゑ

「呼歩行按摩の声さへ幽か「誰家玉笛暗飛声散入春風

満落城」 朧月夜は更けやすい

『かなよみ』 第千弍百壹号 (明治十三年二月二十八日)

当世都々一長唄文句入

鼠遊庵甲子

「口まで出たれど言出し憎ひ (五郎) 「晴てよかるか晴ぬが宜か兎角霞は春くせ」互の胸に覆る雲

「門の柳にツイ招かれて (吉原雀) 「通ひ馴たる土手八町口八町に乗せられて」つけた煙草が縁となり

「思はせ振した其空寝入 (浅妻船) 「こちら向せて引寄てつめつて見ても艚船の」腹は承知の言掛り

「金の時計にぢやれ附猫め (外記猿) 「旦那の前でお辞義をせ転りとせ転りや転りや」喏で此様に惚たらう

「怒つて立たる袂へ縫り (草摺) 「それ其顔で怖い事いふて腹立さんす」機嫌直して飲みなんし

「お前が左様なら妾しも其氣 (越後獅子) 「飯も炊たり水仕事朝よるたびの楽しみは」九尺二間も厭やせぬ

「ぬしの噂をちらりと聞て (汐くみ) 「氣をもみぢ傘白張の殿御に操立がさも相合傘の末かけて」もしやそれかと氣がもめる

『かなよみ』 第千弍百七号 (明治十三年三月六日)

当世都々一 劇場よみ込

賛々亭小さん

「隣り同士の紀の国大和芸も容貌もよしの川

「錦き色増す左右の機敷谷の花かよ土間の美婦

「主の詞は本釣りがねと忍のび三重で来たわたし
「劇場の刃物と忒人が中は切るやうでもきれはせぬ
「月とスツポン違ひはあれど今更未練な役不足
「駅路の鈴よりふりつけられて目には涙の雨おろし
「鳥渡濡場が直キツカケに成てポテンヤン此腹は

日本国名入

「嬉さがみに染々堪へどふで今宵はかひきぬき

「主にあふみと朝夕祈るいづものかみのひきあはせ
「一夜あはではどふしたものと撰津ない思も惚た情

「今夜は来るひだナゼ遅かると独り鬱々ねつおきつ
真宗和讃入

「人も知つたるお前の器量知恵の功名量りなし

「国も開化て我人ともに鴻沢冠らぬものはない

「憑もしいぞへ孤独を恵み憐愍善蒔凡夫人

「鳥渡あなたと袖褻ひかれ思案天怪妾猫嫁

「意気な三筋にツイ浮されて惑髻凡夫春心発

『かなよみ』 第千弍百十壹号 (明治十三年三月十一日)

当世都々一歌沢文句入

竹芝 柚の舎豊哉

「惚たお前にいやがる私 (草も寝鎮む) 「枕一ツに寝もやらず起も直らず又片思ひ」間夫の有るのを聞せた

い

「明日は帰県と地震の鯰 (ふけて逢ふ夜) 「互に見かはす顔と顔眼に持つ涙鼻紙で」権の位も一夜限り

「娼妓を狐と言んすけれど（身は一ツ）「流れに淀むう
たかたの君に逢ふ夜の楫枕」惚た主こそ魅しやせぬ
右同断端唄冠辞 京橋 湾泊十世富

「更て逢ふ夜に嬉しいものは人民保護の角ランプ
「忍ぶ恋路に偕邪魔になる街た街たの瓦斯の照
「書送る文は間怠お顔は見度早く呼たい電信機
「雪は巴に降るその中も鳶び合羽で苦にならぬ
「浅とも学で置が其身の徳よ今は学校所々に有
「嘘と真との其善悪をわけてもらうは裁判所
「硯り引き寄考へ見れど粹な投書は出来もせず

『かなよみ』 第千弍百十六号（明治十三年三月十七日）

当世都々の大問屋 茅場町の 賛々亭小さん

「小鍋立にて飲だる酒が据るお膳の箸わたし
「莞爾笑つてさしたる猪口をすまして返盃は水くさい
「月夜烏と物云ふ花はそら啼よする度迷はせる
「一里半程恥かしさうにヤツと汐干でまくる嫁
「小町桜に迷つた罰か覚めて悔しき夢見草
「たてば芍薬座らぬ尻が末は其身の仇名ぐさ
「願ひかなよみ嬉しい首尾を結ぶ縁しの出雲町
新調小倉都々一 田町の 玉林舎梅雅
「水も洩さぬ二人が中は人にしられて立つ浮き名
「人に笑はれ新聞に記載恋に朽なん名が惜しい
「岩にせかるゝ滝川さへも心くだきてのぼるあゆ

「人の見る眼に袖のみ濡てやくやもしほの身を焦す
「猫にや欺され狐にや嫌れかこち顔なる馬鹿な奴

『かなよみ』 第千弍百二十号（明治十三年三月二十三日）

当世都々一古人俳句入 茅場町 賛々亭小さん
「残る口舌は山程あるにのつと日の出る明けの鐘
「頼む木の下の雨漏る心地汁も膾も吸はせぬ
「翌日は地震で免の字喰ふと聞ば怖ろし雉子の声
「きのふ見た眼にまた珍らしく読んで益有る新聞紙
「切れたは夢で一先安心したが凶事でも有かと胸騒ぎ
前号へ記者先生想像にて都々一問屋と記されしを見て
「都々一杯とは小三恥かしい筆力も文才も有りはせぬ

『かなよみ』 第千弍百二十八号

当世都々一（題） 月雪花に寄る酒の銘 玉林舎梅雅
「積るおもひも猶まさむねヨ慄と素顔の雪の肌
「宵にちらりと顔見る月の姿やさしきいろむすめ
「恋の上野に気も向じまうきを桜の花のえん
南茅場町 賛々亭小三
「梅の若木か桜の苔み色も香も有る嫁盛り
「私ばかりか誰衆の目にも月のかつらの男山
「恋の手管もまだ白妙の娘盛りの雪の肌
本町 うかれ酔史
「初桜あかぬ詠めと思ひし物を野暮な嵐が来散す

「色も香も有る初梅さへも思はぬお方に手折るゝ
「夜るの床の間こちから水を向て活けたや君の花

(該題未尽)

『かなよみ』 第千弍百三十一号 (明治十三年四月六日)

当世都々一端唄詠み込

新川 全亭真隨

「浮気をするなどお前は云へど粹な浮世に野暮しい

「二世も三世も契りし中を人の口ゆゑ遠ざかる

「思ふお方は最う秋の空私しばかりが情立て

「主ゆゑ鯨のお髭はひけど引にひかれぬ物おもひ

「お前は甚助よしてもおくれ片時逢ねばよくよと

右同断百人首歌詠込

茅場町 賛々亭小三

「富士の高嶺に降る雪よりも積るおもひの恋のたけ

「幾夜寝ざめの淋しい儘に隠し喰する若い後家

「夢の通ひ路人目はないがもしや寝言に出はせぬか

「往も帰るもアノ陸蒸気知るも知らぬも連となり

「かみのまにまに採る筆さへも涙交りでにじり書き

『かなよみ』 第千弍百三十七号 (明治十三年四月十三日)

当世都々一 (題) 近江八景

真心亭天地坊

「あはずくよくよ思ひの雲を晴す嵐も他所に咲く

「便り聞たやアノ帰り帆に心ろやばせの遣ひぶみ

「雨にしツぼり色増す松も言葉からさき濡かゝる

「誓ひかたゝの雁がねぶみも落て飛びたつ思ひぐさ
「ひらの峯ほど積りし苦勞消えて口惜や暮のゆき
「思ふ念力いしやま照らす月も曇るや胸の秋
「一イニツ三井のあの晩れの鐘明けは情けも知ぬ音
「瀬田の長橋末ながながと女夫揃ふて朽るまで

『かなよみ』 第千三百四十号 (明治十三年八月十二日)

○《前略》(時に魚鉄の三階で) 二上りの都々逸がチャ
ンチャン「一ツ体の身の中ながらなぜか違た口と腹

『かなよみ』 第千三百六十九号 (明治十三年九月二十一日)

○芝区愛宕町二丁目十五番地なる当時流行の楊弓店別
品揃の名家号ともに詠込の都々逸

松よし

つた、その、みつ

「蕨のからんだその松よしへあつくなりませす蟬しぐれ

月の家

いま、えひ

「さへる月の家ツイ浮か浮かとはまるお客で栄え升

稲本沼田

かね、もと

「かねてもとより沼田の花よみのる稲本うつくしき

昇栄亭

みつ、はな、よね

「みつみつはなしを昇栄亭と思へばよねんは無わいな

吉川

やす、すゞ、かね

「程のよし川気もやすさうないきなすゞ虫小がね虫

立花

つる、はな

「朝顔のつると花とがもたれし竹のすがた立花四目垣
月の屋 花雪作る

『かなよみ』 第千三百八十三号（明治十三年十月八日）

○空がもめればわたしの気までともにもめるは米や町

小たけ

○赤い信女のあの後家さんは他処の寡夫に水を向け

ねこ六

○棹を握ってつくづく眺めたんだねへと三味線や

芝天狗

○ゆびでいちツてモウわれたかと娘督古の日本算

南紺清

○さしみにする気で土手をばいじり横から突込はうて

うめ まさ吉

○若や夫敷と門の戸あけて出て見りや逃出探訪者

おてつ

○パット浮名の新聞雑報以下の次号が気にかゝる

辨きん

○主しと私を取持筆の記者は出雲のかみとやら

うろこ

○摺て居ながらお金をもふけ当時流行の新聞屋

尻子助

○こするとぬらぬらシャボンの水で洗ひあげたる此か

らだ 花のや

○太い後家だよ自由の権と又も孕んで笑ひぐさ
まん徳

○めばへ芸者もそだつに付て今じや住居も植木店

小まつ

○親の手にさへ乗らないものが舟や車にや乗どふし

湾船熊

○入るとすぐゆく郵便箱よ息気をはづんだ人力車

河童慶

○虚言をお前にいゝまはされてわたしや手遊の風車

桐の屋

『かなよみ』 第千三百九十八号（明治十三年十月二

十七日）

○開化都々一

○一寸と依頼んで便りが知れるほんに嬉しい電信機

辨きん

○言に言れぬ私しの胸をステトスコップで聞せ鯛

小かね

○声が高いよ静かにおしな隣座敷はしんぶんや

河かげ

○アレサおよしよ触つちや悪い手出しするなと糸器

械 菅の家

○芸妓にかつぱれ私しの身代も今はそろそろお踊り

出し 月の家